

## アートマネジメント研究について

## 1 目的

「芸術文化と市民の距離を近づける」ためには、行政職員や文化施設職員の力だけでは達成しがたい。より多くの理解者や担い手が必要であり、それぞれがその立場での「協力」をしてくださる必要がある。今回の研究では、その担い手を継続的に無理なく育成するためにはどのような制度設計を必要とするのか調査するもの。

## 2 ファシリテーター養成講座

## (1) 講座概要

|      |                                                                                                                                                                                                |
|------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 講座名  | つくりながら考える実践講座 わたしの表現をワークショップにする                                                                                                                                                                |
| 日程   | 令和6年8月31日(土)～10月20日(日)                                                                                                                                                                         |
| 参加人数 | 12名(うち1名は、第1回目のみ)                                                                                                                                                                              |
| 講師   | 古賀 今日子氏(俳優)                                                                                                                                                                                    |
| 内容   | 説明会 芸術文化振興プラン紹介、講座概要説明<br>第1回 オリエンテーション、自己の表現活動の本質探し<br>第2回 ワークショッププログラムの要素づくり<br>第3回 ワークショッププログラム作成<br>第4回 ワークショッププログラムお試し・ブラッシュアップ<br>第5回 ワークショップ実践(3日間)※大野東小、下大利小、平野小学校ランドセルクラブ<br>第6回 振り返り |

## (2) 内容設計までの経緯

昨年度のブレ講座を踏まえ、6回という回数では、ワークショップの作成方法の学びとファシリテーションスキルの学びの時間を確保することは難しい。そのため、今回の講座では「自分の表現活動の本質を見つめること、相手に表現の面白さを届けるためのワークショッププログラムをすること」をメインに実施することとした。

ただし、昨年度のブレ講座を踏まえ、講座の制度設計の段階より「現場」に持っていくことは必須事項となっていたため、講座内で作成したプログラムを現場に届けるというプログラムは実施。ただし、講師がフォローするという形をとることとした。

## (3) 結果

- 参加の要件を「市内で活動可能な人」とし、大野城市在中か否かは問わなかった。そのことで、市外からの参加者も多く、初めて大野城市やまどかぴあの取組に参加した人も多かった。市やまどかぴあの文化施策に関係してくれる人を増やすことができた。
- 参加者が自分の表現を見つめなおすだけでなく、異なる表現活動を行っている人と出会うことで、悩みや考えを共有、共感、違いを知る機会となった。表現活動を行う「仲間がいる」という実感の場の提供。

- ランドセルクラブにてワークショップを実践することで、作成したプログラムを楽しんでもらった達成感とともに、進行することの難しさを感じることができた。そして、講座を経て、次回はこうしたいという次の活動へのきっかけとなった受講生もいた。
- ランドセルクラブにて表現ワークショップを実施したが、子どもたちが表現活動に触れることで、「自己表現に間違いはない」という「芸術文化」ならではの考え方を体感することで、普段とは異なる表情や動きを見ることができた。児童だけでなく、ランドセルクラブコーディネーターや支援員にも、表現活動を知ってもらうことができた。

## (4) 講座からわかったこと・課題

- ファシリテートスキルの育成には、一度の講座受講だけでなく、継続的な支援や経験が必要。
- 講座終了後も、受講生同士で連絡を取り合ったり、お互いの活動の報告をしているという話を受講生から聞いた。アーティスト同士のつながりの構築が、アーティストの活動のきっかけやモチベーションにもなりうる。
- 受講生にとっては、現場での実践は必要な要素であるが、ファシリテーター養成の側面をより強く設けるのであれば、実践の場をどこに設けるのかについて、再検討する必要がある。

## (5) 次年度以降の方針

- (4)の課題を踏まえた継続的な講座の制度の構築、実施
- 講座を受講する上でのメリットや、その後の大野城市での活動につながるための、取組の検討



### （５）ランドセルクラブでの実践の様子について【参考】

本講座では、ランドセルクラブに協力を仰ぎ、受講生の実践の場として、小学校３年生から６年生がワークショップを受講した。その様子は、講座自体の成果とは別に、子どもたちに表現活動を通したコミュニケーションや仲間との関りなど、芸術文化の持つ社会的価値に触れてもらう機会となり、講座の副産物として紹介する。

#### ① 子どもたちのワークショップ内での変化

「ワークをする」「見る」「聞く」など、様々な参加の方法を認める場と設定することで、児童一人一人の「居場所」が作られた。そのような場の中で見られた子どもたちの変化を一部紹介する。

- ・日頃、体験活動の輪に入らない児童が、自分が発した何気ない一言を講師に拾ってもらったことがきっかけで、積極的にワークショップ参加していた。その後、グループ内で、身体を使って表現するワークでも中心で動いていた。
- ・にぎやかな児童が多い学校で、最初のワークから、内容に真正面に向き合い、参加している児童がいた。その児童の表現の場を担保するグループ分けをすることで、自ら進んで考えを表現することができていた。周囲も、その児童の普段とは異なる一面を見たとき驚いていた。
- ・ワークには参加をせず、周りで座って様子を見ている児童がいた。ワークには参加こそしなかったが、終盤には、ワークの題材になっていた校歌と一緒に口ずさんでいた。

#### ② ランドセルクラブ関係者の声

- ・自分が表現したことに対し、ほかの人が笑ってくれたり、反応してくれることや、他の人が自分と違う表現をしていることが面白いと思えたり、声を出して認めることができ、表現活動特有の自由な雰囲気が良いと思った。
- ・子どもたちは、感想を書くように言うとき「書きたくない」などと言うが、今回は子供たちから「書かせてください」と「書きたい、書きたい」といつもよりいっぱい書いてくれた。楽しかったんだと思う。支援員さんも、子どもたちを見て楽しんでいた。
- ・一番印象に感じたことは、子ども同士で否定する雰囲気がなかったこと。普段、周りが何かするとふざけたり、否定する子がいるが、今回に関しては、誰かが何かしたことにより「それ違うやろ」などの否定する言葉や様子は全くなかった。そのような活動はとてもいいなと感じた。
- ・日頃の活動では、いつも困ったような顔をしている女の子が、校歌を身体で表現しようというワークでは、普段見せないような、自分の殻を破ったような姿で、グループの仲間と楽しんでいた嬉しかった。仲間と関わったり、いつもと違う人が関わってくれることで、子ども達も心を開いて良い経験ができたのかなと思った。
- ・子ども達の表現力がすごく、大人が思いつかないような表現を「そうくるか!」というものがああり、驚かされた。

### ３ レポーター養成講座

#### （１）講座概要

|      |                                                                                                                             |
|------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 講座名  | 大野城市芸術文化情報サイト「ツナグト」レポーター養成講座                                                                                                |
| 日程   | 令和６年12月15日（土）～令和７年1月26日（日）                                                                                                  |
| 参加人数 | 9名                                                                                                                          |
| 講師   | 三好剛平氏、長津結一郎氏                                                                                                                |
| 内容   | 第1回 イントロダクション、レポート添削、講義<br>第2回 芸術文化事業見学（わたしが知ってる大野城のはなし 東地区の巻）<br>課題：見学した事業のレポート作成<br>第3回 課題レポートの添削、講義<br>第4回 課題レポートの添削、まとめ |

#### （２）講座の目的

市民と同様の立場である「市民」レポーターが、より市民に近い視点で情報を伝えることで、芸術文化やジャンルの興味の有無に関わらず、市民に芸術文化の「ハードルの高さ」「敷居の高さ」をなくしてもらおう一助としたい。体裁の整った上手な記事作成を学ぶ講座ではなく、事業やイベントのポイントを見つける方法や伝え方を学ぶと内容としたい。

#### （３）結果

- ・参加者は、市が考える「ツナグト」や「市民レポートページ」の在り方について、理解しながら講座に臨んでくれていた。講師より、記事を書くポイントだけではなく、「伝える」ために必要なポイントを講義いただくことで、それらの理解が促進された。
- ・レポートを作成する際、重要なことは「誰に向けた」レポートなのかということである。講座の課題でも、「家族」「自分と同様に転入した人」など、対象者がはっきりしている方が、レポーターの個性や想いが込められた血の通ったレポートとなりやすく、伝わりやすい。
- ・記事を書く作業は、個々の取組になるが、参加者同士で悩みや感じたことを共有することで、交流が生まれた。また、交流の時間が参加者にとって、有益な時間であったことが分かった。

#### （４）講座の実施によりわかったこと・課題

- ・市民レポートページのコンセプトは、芸術文化振興プランやツナグトと同様「芸術文化と市民との距離を近づける」ことで相違なく、レポーターは、「芸術文化に興味を持っている誰か」など漠然とした対象ではなく、具体的な誰かを対象と設定することが重要である。
- ・ツナグト構築時にも重要な視点としていた「遠くの誰かではなく、となりのあなた」といった考え方を重視し、「あなた」の部分はレポーター自身が、取材対象を踏まえて具体的な何かに置きかえるなど、記事を書く際の共通する考え方等を設定することが必要である。
- ・「市民レポーター」制度を実施する中で、定期的な「編集会議」を実施し、レポーター同士の交流を踏まえた取組を実施することが、レポーターの意欲を高めるためにも重要である。

(5) 次年度以降の方針

今年度の研究結果を踏まえ、以下の内容を実施する。

- ・レポーター制度の構築と制度の開始
- ・レポーター制度の進め方の検討、実施
- ・レポーター講座の実施

(6) 講座の様子

①第1回



②第2回

○事前研修



○ワークショップ現場の見学（場の様子や装飾物など）及び共有



○事業見学・アーティストへのインタビュー



③第3回

